レッツ発掘！

男性養護教諭図鑑

Takashi Iino

飯野 崇 先生

東京都立王子特別支援学校
養護教諭

「興味があることにためらわずチャレンジすること、主体的に学び続けること、そんな姿勢をこれからも大切にしたい！」

整体師や障害者施設職員として勤務されたご経歴をお持ちの飯野先生に、今回はお話を伺いました！

<今回のインタビュアー>
妻鹿 智晃
（帝京短期大学 講師）

先生のご経歴を教えてください！

現在は、東京都立王子特別支援学校という全校児童生徒550名を超える、都内最大規模の特別支援学校で複数配置勤務をしています。5年程前に、元々別の学校として設置されていた小・中学部と高等部が合併され、現在は知的障害のある6歳から18歳までの児童生徒が共に同じ校舎の中で学びを深めています。

現任校は私にとって2校目の勤務校であり、初任校も同じく特別支援学校でしたが、障害種別が異なり、聴覚に障害のある子どもが通うろう学校で6年間お世話になりました。

私の場合、養護教諭として本採用をいただくまでに少し時間がかかってしまって。そんな折に、「ちょっと他にもやってみたいことがあるんだったらチャレンジをしてみて、30歳くらいを目途に本格的に教員としての道を歩むか…」と。そんな風に考えている中で、自分の腕で人を喜ばせることができる仕事にも魅力を感じていたこともあり、夜間の学校に通って資格を取得し、結果3年程整体師として働いていたこともありました。加えて、障害者施設でも3年程の勤務経験があり、合計6年間は養護教諭以外の仕事をしていたことになります。

学校現場以外でのご経験が、養護教諭としての勤務に活かされていると感じることを教えてください

色んな職場での勤務を経験させていただいたので、新しい場所に溶け込むというか、周りの雰囲気を察して動くという姿勢は、自然に身に付いたなと感じます。それから、障害者施設で勤務をしていた頃、自閉症の方に徹底的に寄り添う経験ができました。このことから、障害のある方のリアルな日常であったり、当事者を支える家族が抱える困難さであったりといったものへの理解を深めることができて…。こうしたことから感じられた「共感」を、養護教諭としての子どもへの関わりに活かすことができていると感じます。

先生が養護教諭を目指された何かきっかけがあれば、教えてください

中学生の頃、保健の授業内で調べ学習をした際、漠然と「人の健康に関わる仕事に就きたいな」と思ったことが、最初のきっかけでした。このき

っかけを元に、高校卒業時私が進路先として選んだのは、臨床検査技師になるための学部でした。ですが、学びを進めていくうちに、機械を相手にする勉強というものに興味が薄れていってしまって。「やっぱり人と接する仕事がしたいな」と思った矢先、コース変更の選択肢として養護教諭養成課程が設けられていることに気付き、専攻の変更を申し出ました。なので、私が養護教諭という職を具体的に目指し始めたのは、大学に入ってからなんですよね。元々、保健室に縁遠い小・中・高校生活を送っていたこともあり、自分の知らない保健室のことを学ぶにつれて、「こんな視点で子どもをみていたんだな」と感じると同時に、「自分だったらこうした関わりをしてみたいな」といったイメージを膨らませることで、養護教諭の仕事に一層興味をもつようになりました。

現在、先生が特に力を入れて取り組まれていることを教えてください

子どもたちにとって、「入りやすい保健室の雰囲気づくり」を心がけています。自分自身、学生時代に出会った養護教諭の先生がどこか近寄りがたい雰囲気の方で。（笑）一度話をしただけで、こうしたイメージをもってしまった経験があります。それ以降、保健室になかなか足が向かなかったことが、今思うととても残念なことだなと感じてしまうんです。なので、自分はけがの処置を行う場面の関わりだけでなく、それ以外の場面でも、積極的に子どもたちに声を掛け、関わりをもつように心がけています。

あとは、保健室にやって来た子どもと共に考える。なぜけがをしてしまった?どうしたら防げるんだろう?と、処置＋αを意識しています。

加えて、実は来年度更に大幅に児童生徒数が増える見込みで、保健管理の面で改善がものすごく必要だと感じています。子どもたち一人一人の保健に関する情報を、保健室内のみならず、担任の先生方とも的確に共有を図り、安心して子どもたちを見守ることができる体制づくりに、今後力を入れて取り組んでいきたいと考えています。

長きに渡って、ろう学校にご勤務をされていたとのことで、その頃のお話をお聞かせください

前任校であるろう学校に着任が決まった当時、私は手話のスキルが全くといっていいほどない状態でした。当然、子どもたちとのやり取りにも苦慮する訳なのですが、そんな中、難聴の子ども（いわゆる周囲が静かであれば言葉を聞き取ることができたり、声を出すことができる子）が通訳の様な形で、私とろうの子との間に入ってくれて、コミュニケーションを図る、といった具合に助けられる場面が多くありました。

そんな中、手話スキルを高めるために、地域の講習会に根気強く通い、技術を少しずつ身に付けていきました。当初は私も「ろう学校で子どもたちと毎日のように接していれば、おのずと技術が身に付くだろう」と高を括っていましたが、そんなことは全然なくて。（笑）やはり、主体的に学ぶ姿勢がなければ、全く身に付かなかったんですよ。子どもとのコミュニケーションが満足にとれない間は自分の中でもなんだかモヤモヤしたものがあったので、結局3年間くらいは週に1回程のペースで講習会に通い続けていました。とはいえ、自分の手話に多少自信がもてるようになり、日々のコミュニケーションをそつなくこなすことができるようになってからも、難しいなと感じることもあって。感情や自らの想いを手話に乗せて必死に伝えようとする子の言葉を（手話が早すぎて）読み取れなかった時に、「この人に言ってもダメだ」という表情をするんですよね。こうした経験を通して、子どもと向き合う上で手話を読み取ることの重要性をより強く感じました。

最後に、先生の今後の展望をぜひお聞かせください！

今ほどお話したとおり、前任校がろう学校で、手話も必死になって覚えたということもあるんですけれど、今も実は現場を離れてからも定期的に手話講習会に通って、手話やろうの方と距離を置かないよう心がけているんですね。で、その講習会に行くと、ろうの方々の文化への理解がより深まったりだとか、今まで以上に見えてきたものもありまして。また、異動をする機会に恵まれたら、自身のこれまでの経験を活かして、ろう教育に携わりたいと思います。

【レッツ発掘！男性養護教諭図鑑】
発行：男性養護教諭友の会事務局
編集：長野 雄樹（名古屋市立西特別支援学校）